

回想・城北中学

重松開三郎

我々が一期生として入学した時の城北中学時代は、昭和十六年から二十年である。

この時代は、対米戦争に明け暮れた時期で、食糧、衣服を初め、すべての物資が欠乏していた時代だから、楽しかった思い出はほとんどないが印象に残ったものは少なくない。

そのいくつかを振り返ってみる。

「お父ちゃん」の思い出

開校当時、一期生の面々は、城北予備校の空き教室を利用して、授業を受けていた。九月からの転入生だった私は、例外を除き、(いじめ)の迫害には遭わなかったが、唯一の例外は、「お父ちゃん」と仇名されていた生徒だった。(数年前、他界)

彼は、仇名が示す通り、恐ろしい顔付きの生徒で暴力を振るう訳ではないが、顔を合わせる度に理由もなく執拗に脅かされるので、忍耐もこれまでと思うようになってきた。

そんなある日、いつもの脅し文句が始まったので、堪忍袋の緒を切った私が、喧嘩の前口上を叫んだ途端、「お父ちゃん」の態度が俄かに軟化し友好的になった。

彼の突然の変化に呆然としていた私に、友人が囁いた。「彼は喧嘩が出来るような身体じゃないんだよ。ほっとけばよいのさ」

後で分った事であるが、四月からの入学生は入校時に、「お父ちゃん」の特異体質を聞かされていたのだが、転入生の私は聞かされていなかったのである。

しかし、ここで、幼い頃から繰り返し聞かされた母の教訓を思い出した。

「この世の中には、身体不自由な人が沢山いる。五体満足に育ったお前は感謝しなければならぬ。」

と言われても周囲の友人は元気な者ばかりだから、実感がなかった。

「お父ちゃん」は気の毒に幼少期に小児麻痺を患ったため、腕が細く、当時、軍事教練で持たされた三八式歩兵銃(模擬銃)・3・95kgを片手では持ち上げられない状態だった。

後日、「お父ちゃん」の腕を見る機会があったが、その細いこと、私の半分以下だったから、あの時、取っ組み合いの喧嘩でもしていたら、

彼の腕を折ったかも知れない。

我慢してよかったと、つくづく思った。

《注》三八式とは、明治三八年制式を意味し、当時（一九四一年）から四十年近くも前に制定された旧式銃。新型銃を支給された部隊はごく一部で、大部分の兵士は旧式銃で米軍の自動小銃と戦わされた。

有機肥料貯留槽《肥溜め》の悲喜劇

当時でも化学肥料はあったが、農家が使っていた肥料は、その大部分が人糞だった。

人糞は鮮度が良すぎると弊害が出るので、どこの農家でも《肥溜め》と称する貯留槽を設け、大量の人糞を貯えていた。

当時、城北中学が仮住まいをさせてもらっていた赤塚小学校周辺の斜面には、《肥溜め》が数多く存在していたが、その中に貯留されていた人糞は、投入後、数日経過すると表面が変貌し、一見、枯れた雑草が重なった地面のように見えるため、誤認をして落ちて黄金仏のようになった生徒が数人いた。

戦後、タレントとして活躍した「前武」（先年、物故）も、その一人である。

さて、この《肥溜め》に石を投げ込むと水柱ではなく黄金柱が立つことが分かった。

黄金柱は、石が大きければ大きいほど壮観を呈するので実行される度に、石が大きくなる傾向があった。

ある日、投石を決行した。

石の大きさは過去に例を見ない最大級だが、あまりに大きいと中央に達しない恐れがある。

また、投げ込んだら、急いで退避しないと黄金雨を浴びるおそれも少なくない。

大体、投石の目的は、黄金柱の視認であるから、黄金柱が立ち上がる前に振り返り、しっかりと視認しなければ意味がない。

このように必要条件是多かったが、投石は成功し、過去最大の黄金柱が直立した。

当時は、達成感と一種の感銘を覚えたが、今になって考えると、農家の人々の迷惑を顧みない不心得の極みの行為であったと思う。

当時は《肥溜め》が巨大なこともあり、罪悪感を全く感じなかった。慙愧に堪えない。

投稿者現況

一九四九年に入社した「重松製作所」を二〇〇九年に退社し、その一年前に、自動車運転を止め、現在は二本足で歩いています。三本足への昇格は目前です。

旧臘二六日、大宮市内で転倒、顔面負傷で救急車の世話になりました。回復程度は二月五日にご覧に入れます。乞う御期待。